フェミニズム理論と教育

井　口　博　充
東亜大学　総合人間・人間動態論研究室
E-mail: inoh@po.cc.toua-u.ac.jp

1. はじめに

最近、日本でも、ようやくジェンダーと教育の問題が注目を集めるようになってきた。まず、ジェンダーの力関係が生み出す結果的不平等（ジェンダー・ギャップ）が主要な問題とされてきた。さらに、学校教育における「隠れたカリキュラム」によって、既存の社会の「男らしさ」、「女らしさ」が無意識のうちに再生産されてしまうという問題が指摘されてきている。例えば、「女は公の場で、すすんで自分の意見を言うべきではない」とか、「女は進んで、掃除や子どもの世話をしなければならない」というような社会で暗黙の常識となっている規範を教育の場で知らず知らずのうちに教え込んでいるといった点である。この問題に応えて、教育現場でも、「ジェンダー・フリー教育」、つまり児童・生徒に「男らしさ」、「女らしさ」を押しつけない教育、の実践が行われるようになってきた（例えば、ジェンダーに敏感な学習を考える会　2001）。

しかしながら、教育におけるジェンダーに対する関心が、近年のフェミニズムの理論的発展に対応しているかと言えば、必ずしもそうではないように思われる。本稿では、近年のフェミニズム理論を紹介し、教育との関連を探ってみたい。これまでのジェンダー観、「男らしさ」・「女らしさ」を批判する場合、新たな観点に立つことが求められ、その観点は理論的に整合的であることを求められているからである。つまり、今までの教育の内容・方法において男性中心の知識、視点が支配的であったと主張するとしたら、それではそれに対抗する視点、つまり「女性の視点」とはどのようなものであるのかを理論的に確立する必要があると考えるからである。

2. フェミニスト立場理論

70年代後半から80年代は、フェミニズム内部において理論が多極化した時代であったといえるが、それは、政治的にも、学問的にも、一つの勢力を形成しつつある「フェミニズム」に対する、フェミニスト内部からの鋭い批判に端を発するものであった。そのような批判について言及する前に、この時期に既存の勢力となりつつあったフェミニズム勢力の内部で概ね支持されていた、そして、現在も概ね支持されている、「知識」に関する理論（特に、認識論）および研究方法（特に、社会学的方法）について述べておきたい。それは「フェミニスト立場理論」（feminist standpoint theory）と呼ばれる理論であり、「質的」（qualitative）な資料や分析を重視する「経験主義的な」（empirical）方法である。

「フェミニスト立場理論」は、「女性の経験」を重視し、様々な領域において、男性の立場からの主張や研究（＝知識）が「中立」また「客観的」とされてきたことを批判し、女性の経験に基づく知識を正統化（そして、正当化）する理論として用いられている。フェミニスト立場

東亜大学　総合人間・文化学部『総合人間科学』第3巻，2003年 3月，pp. 11-18

理論という言葉における、「立場」(standpoint) という概念そのものは、マルクス主義において階級関係を論じる際に、「プロレタリア［労働者階級］の観点」(point of view of the proletariat) という概念を起源としている。労働者は、自らの経験や行為（＝自らの立場）から得た洞察を持つ点において、資本主義社会で恵まれた立場にいる学者よりも優れた社会分析を行い得るという議論である。また、被支配者の行う分析は、より完全な分析でもある。なぜなら、被支配者は現実社会において生き残るために支配者側の論理も理解せざるをえず、結果として被支配者側の観点と支配者側の観点の両者を身に付けることができ、それを分析に活かすことができるからである。

フェミニストたちは「プロレタリア」を「女性」に置き換え、次のように主張した。女性は自らの経験や行為から得た洞察を持つ点において、家父長制社会において恵まれた立場にいる男性よりも優れた社会分析を行うことができる。なぜなら、女性は様々な社会現象を男性の立場から見るとともに、女性の立場からも見ることができ、したがって両者の違いを知ると同時に、その違いを生むところの権力関係の働きをより完全に分析できるからである(1)。

さて、フェミニスト立場理論が主張されると同時に、知識を生み出す方法の見直しも始まった。特に、社会学では、どちらかと言うと、インタビューや観察などからなるエスノグラフィックな資料を基に質的分析を行うものが、フェミニスト的な知識の生産方法だと考えられた。教育分野においてもこの点は同じであり、キャサリン・ウェイラーは『社会変革のために教える女性』(Women Teaching for Change) という著作の中で、フェミニスト研究方法 (feminist methodology) について、三つの特徴を指摘している (Weiler 1988)。第一に、フェミニスト研究者は自分たち女性の主観的な経験や知識が真であると認識することから出発すること。第二に、女性の生きられた経験 (lived experience) を重視し、日常生活に注目すること。第三に、女性を研究するのが目的ではなく、女性をめぐる差別・不平等を是正することを目的とすることである。

「立場理論フェミニスト」は「女性の立場」から「女性の経験」に基づいて知識を生産することを目指すのであり、そこでは、被抑圧者である女性の生の声を聞き、その声を一般に伝えることが一つの重要なポイントとなる。例えば、実際に教育現場に出かけ、女教師や女生徒に女性差別の実態を語ってもらい、その結果を報告するような研究方法は、フェミニスト立場理論にたつ経験主義的方法と言ってよいであろう。また、このような理論／方法論に立てば、フェミニスト的な教育とは、女性たちが自らの被抑圧経験を語り合い、身体上・精神上の苦痛を分かち合い、怒りやレジスタンスを肯定し合うことを通して、「女性一般の経験」や「女性一般の問題」に気づき、不平等是正・女性解放のための実践を思考し、個人的また社会的に自ら実践すること、というように表現できるだろう。実際、このような実践は、1970 年以降の女性解放運動の中で、コンシャスネス・レイジング（意識覚醒運動）という形で取り組まれた。

さて、以上のような「フェミニスト的研究」に対する疑問は、主に (1) 第三世界フェミニスト (third world feminist) と総称されるような有色人種 (非白人) 女性 (women of color)、労働者階級出身のフェミニスト、さらにレズビアン・フェミニストといった様々な立場、つまり、女性内部における多様性（差異、differences）を主張する立場、さらに (2) ポスト構造主義フェミニスト (poststructuralist feminist) およびポストモダン・フェミニスト (postmodern feminist) の立場からなされたと言ってよい。二つの批判的立場は理論的に重なる部分もあり、両方の立場に立つ人々もいないわけではないが、厳密にはやや異なる含意を持つ。また、二つの批判的立場は、「フェミニスト的な知識生産の在り方」そのものを否定するものではなく、それまでの理論が暗黙の前提として受け入れてしまっていることに疑問を投げかけることにより、理論をより拡張し、実践

的なものとするものであると考えられる。以下で詳しく見てみよう。

3. 第三世界フェミニスト、レズビアン・フェミニスト、多様なフェミニスト

まず、多様性を主張するフェミニストが批判するのは、それまでの白人・中産階級・異性愛者中心のフェミニズムのあり方である。特に、白人フェミニストのレイシズム（人種差別、racism）が大きな批判の的となった。このような批判はフェミニズム運動の開始以来（少なくとも70年代全体を通して）、フェミニストの運動に内在していたものであるが、批判としての正統性が認められたのは80年代初頭である。

1981年6月の全米女性研究協会（NWSA、The National Women's Studies Association）の第3回大会のテーマは「女がレイシズムに応える」（"Women Respond to Racism"）というもので、第三世界フェミニストたちから出されてきた批判に応えようとするものであったが、残念なことにフェミニズム内部のレイシズムを乗り越えるものとはならなかった。しかし、この大会をきっかけに、全米第三世界女性連合（The National Third World Women's Alliance）という組織が生まれ、月刊のニューズレターや非白人女性による著作を発行することになった。ここでの重要な変化は、有色の女性たち（women of color）が白人フェミニストのレイシズムを、真正面から問題にし始めたことである。第三世界フェミニストの一人でもあるグロリア・アンザルデューア（Gloria Anzaldua）は白人フェミニストのレイシズムを次のように批判している。

> しばしば、白人フェミニストたちは、私たちは皆女性であり、レズビアンであり、同じような性的ジェンダー的抑圧を経験する、という事実に安住することによって、人種による差異を最小限にとどめたいとする。彼女たちは概念としての「差異」ではなく、「差異」が現実に存在すること（actuality of "differences"）に普通悩まされており、人種による差異を不鮮明にすることを望み、物事を平穏に治めたいとする。彼女たちは完璧な全体化するアイデンティティ（a complete, totalizing identity）を求めているように思える。にもかかわらず、彼女たちは似通う点を目立たせようと熱心に試みる中で、階級といった「他の」差異を持ち出し強調する。……白人女性は、有色女性の間に人種、セクシュアル[な志向]、階級の「差異」があることを指摘し分析する行為において、これらの差異を分析の対象としてモノ化するだけではなく、自分たちの白人的な人種化した目、モノを検査する疎外的な目で眺めることによって変容させるのである（Anzaldua 1990, p. xxi）。

レイシズムの問題は女性運動の中で周辺部においやられがちであったが、第三世界フェミニストたちは、それがフェミニストの直面している問題であることを明解に指摘し、白人フェミニストたちは従来の行動形態の変革に真剣に取り組むべきであるとした。例えば、『顔を創ること、魂を創ること』（Making Face, Making Soul）という著作に収められている論文において、バーバラ・スミス（Barbara Smith）は次のように指摘している。

> フェミニズムとは、全ての女性を解放するために闘う政治的理論と実践である。全ての女性とは、白人の経済的に恵まれたヘテロセクシュアルの女性のみならず、有色の女性、労働者階級の女性、貧しい女性、障害を持つ女性、レズビアン、年取った女性を含む。完全な解放というこの考えを満足させないものは何であれ、それはフェミニズムではなく、単に自己の利を増大させているだけである（Smith 1990, p. 25 ）。

第三世界フェミニストの批判に平行して、レズビアン（ホモセクシュアル）のフェミニストたちも自らの立場を明確に主張し始めた。例えば、詩人であり、フェミニスト活動家でもあるエイドリアン・リッチ（Adrienne Rich）がその

代表にあげられるだろう。セクシュアリティの問題は（中絶問題と並んで）、現代アメリカを象徴する政治的な問題であるが、リッチに代表されるようなフェミニストは、それまでのフェミニスト運動において、異性愛者（ヘテロセクシャル）を規範とする考え方が、暗黙の前提とされてきたことを批判したと言えるだろう。

では、このような多様性を主張するフェミニストが、フェミニスト知識理論及び教育理論に与えた影響は何だったのだろうか。まず第一に、彼女たちは、「女性」と一口に言っても、そのカテゴリーに属する人たちは多様であるという点を明確にした。つまり、多様性を主張するフェミニストたちは、フェミニズム運動において「女性」とはいったい誰であったのかを脱構築したといえよう。そして、それは、現代のフェミニスト運動が解決しなくてはならない、二律背反とでも言うべき難問を提起している。フェミニスト運動が「女性」の解放を目指す運動である以上、「女性」というカテゴリーを設定せざるを得ないにもかかわらず、女たちの中にもいろいろな立場があるのであり、それを「女性」というカテゴリーでくくって論を立てることは危険であるばかりではなく、ある立場にあるものを排除することに繋がるという問題である(2)。

「女性」というカテゴリーに関わる二律背反は、フェミニスト運動においてだけではなく、フェミニスト的教育活動の問題としても重要な示唆を持つ。例えば、コンシャスネス・レイジングをモデルとするフェミニスト教育では「全女性に共通する経験があること」が大きな前提となっていた。女性という集団内部の差異を認めることは、「全女性の共通経験」というフェミニズムの中核となる概念に疑いを抱かせ、それを前提とする教育的活動に疑問を投げかける。

むしろ、女性内部の多様性をみとめる立場から考えた時、フェミニスト的な教育活動とは、個々の教育状況において、ジェンダーのみならず、人種／民族、階級、セクシュアリティなどを軸とする様々な抑圧的力関係が、どのように複雑に作用しあっているのかを問うものである。そこでは、例えば、セクシズムとレイシズムの両者によって差別されるマイノリティーの女性たち（＝「他の女性」たち、the other women）の声が重視される。さらに、今まで「一般の女性」とみなされていた女性たちが、人種／民族や階級という関係を軸にすれば、自分たちは比較的豊かな暮らしをする支配的な人種／民族に属する者であり、自分たちと異なる「他の女性」たちを抑圧する者であることに気づく必要がある。そのためには、「一般の女性」の経験を肯定するというよりは、厳しく問い直す必要が出てくるのである。

日本の文脈で言えば、「日本人」中産階級主体だったフェミニスト運動を被差別部落、在日韓国・朝鮮人、在日外国人など被差別集団に属するの女性の視点から、再検討することである。さらに、女性差別の問題を議論する際に、日本（企業）が搾取してきたアジアの女性たちの視点や、かつて日本軍の性奴隷とされた「従軍慰安婦」の問題を周辺化するのではなく、フェミニスト教育運動の中心的課題として持ち込むことが求められているのである（例えば、鄭　1996）。

4. ポスト構造主義フェミニスト、ポストモダン・フェミニスト

80年代に入って一部のフェミニストたちはフーコー（Michel Foucault）、デリダ（Jacques Derrida）、リオタール（Jean-Francois Lyotard）、クリステヴァ（Julia Kristeva）といったポストモダン諸思想を積極的に受容し、それまでの「フェミニスト立場理論」に立つ研究者たちの研究の方法論（methodology）、認識論（epistemology）、存在論（ontology）等に対して理論的な批判を開始し、両者は対立した。この対立は、90年に入って、解消されるというよりも、深まったという感がある。（「フェミニスト立場理論」の代表的研究者としては、サンドラ・ハーディング（Sandra Harding）やドロシー・スミス（Dorothy Smith）をあげることができ、ポストモダン・フェミニ

スト、あるいはポスト構造主義フェミニストと称する研究者としては、ジュディス・バトラー(Judith Butler)、ジェイン・フラックス(Jane Flax)、およびジョアン・スコット(Joan W. Scott)をあげることができるだろう。)

各地の学会において顕在化する対立の深刻さを、ポストモダン側に属するフラックスは、1990年春のある会議での出来事をふりかえって、次のように描いている。「このような敵意に満ちた状況の経験として思い出せる最後のものは……公民権運動においてブラック・パワーと白人の役割についての意見の不一致が爆発した1967年である」(Flax 1992, p. 445)。また、フェミニスト立場理論側からは、ドロシー・スミスが、1992年春の南カリフォルニア大学での学会を振り返って、ポストモダン・フェミニストの議論は、一般の女性参加者をあまりに困惑させたので、いつものように聴衆の中から立ち上がって学問的な議論の安閑とした進行を批判する女性は、一人もいなかったと記している(Smith 1993)。何が、両者を、これほど鋭く対立させているのだろうか。

「ポストモダンとは何か」という問題はそれ自体が興味深い問題ではある。しかし、何が構造主義で、何がポスト構造主義で、何がポストモダン主義なのかは論者たちの間でも意見の一致を見ていない。基本的には、ポスト構造主義は構造主義を批判継承する流れであり、ポストモダンは近代主義(特に、啓蒙主義)を批判する流れであるが、以上は関係的(relational)な関係であると言ってよく、何を構造主義と考えるか、何を近代主義と考えるかによって、何が「ポスト」かが変わってくる。とはいえ、ポスト構造主義とポストモダン主義で、どちらがよりはっきりと理論的基礎を明示しているかと言えば、それはポスト構造主義である。ポスト構造主義は構造主義を否定するものではなく、構造主義の発展・変容したものと考えてよい。70年代に、構造主義は、三つの「ポスト」的な流れに分化したと考えられる。第一は、記号論を継承し、民衆文化(ポピュラー・カルチャー)研究等の分野を形成した流れ、第二は、ジャック・デリダ(Jacques Derrida)に始まる、文学分析やテクスト分析における脱構築の流れ、そして、第三は、構造主義に精神分析理論を取り入れ、意味の生産における身体(body)や快感(pleasure)の役割に目を向け出した流れ(これを指してポスト構造主義と呼ぶ場合もある)である。フェミニストにとって最も重要であったのは、精神分析理論を取り込んだ第三の流れであるといえるが、第一・第二の流れもフェミニストのテクスト分析に大きな影響を与えている。

以上のような背景を念頭におきながら、ここでは、「ポストモダンとは何か」自体を問うのではなく、フェミニストによるポストモダン論争では何が問題となっているのかという点に焦点をあわせたい(3)。精神分析家であり、ポストモダン・フェミニズムの論客でもあるフラックスは、『フェミニズム/ポストモダニズム』(Feminism/Postmodernism)に収められている論文の中で、ポストモダン理論とフェミニズムの関係に関して論じている。フラックスによれば、ポストモダンの諸言説は全て脱構築的であり、現代の西洋文化において当たり前と見なされていたり、西洋文化を正統化することに奉仕するような、真理、知識、権力、自己、および言語に関わる様々な信念に対し、人々が距離を置き、疑ってみるよう求めている。一方、フェミニズム運動においても、理性に基づく知識や真理の追究という広く一般(つまり、男性社会)に信奉されている考え方は、常に疑われてきたが、それは実は啓蒙主義的なものに対する批判であり、まさにポストモダン主義者と共通するものである(Flax 1990)。

言わば、フェミニストの運動は、ある種の脱構築によってその地場を確立してきた。例えば、「一般的・普遍的な真理」あるいは「唯一絶対の真理」と称するものが、実は男性の立場からの知識に過ぎなかったこと、「人間」(man)という言葉が実際に指しているのが「男」だけであったことなどを明確にしてきた。このことを鑑みれば、フェミニスト運動がポストモダン理論のある部分を継承することは、しごく当然

なことで、両者は親和的な関係にあるといえよう。例えば、第三世界のフェミニストのような「女性」の多様性を主張する立場は、ポストモダン理論によってより精巧に説明することができる。バトラーは『フェミニストが政治的なるものを理論化する』(Feminists Theorize the Political) 所収の論文において、フェミニズムにとってポストモダン理論が重要な意味を持つ理由は、ポストモダン理論がいかに理論や哲学がつねに権力に巻き込まれているかを明らかにしようとする、批判的行為であるからであると述べている (Butler 1992)。

確かに、フェミニズムが、あらゆる既成のカテゴリーを徹底的に疑うことにその根本的特徴があるとすれば、それはポストモダンの在り方に似通う点があるかもしれない。しかし、ポストモダン諸理論を考慮することは、フェミニスト運動 (および研究) の基本的方法に対し、多くの困難な諸問題を投げかけるものでもある。そのような諸問題については、バトラーとスコットが『フェミニストが政治的なるものを理論化する』のイントロダクションの中で列挙しているが、その内でも「フェミニスト的研究」と「フェミニスト的知識」に関して最も重要な問題は、「多様性」と「経験」に関する議論である。

ポストモダン・フェミニストたちは「女性」の多様性を主張する。第三世界フェミニストたちの主張する「女性の多様性」が、フェミニスト運動に二律背反的問題をもたらすことは、既に述べた。ポストモダン理論は「多様性」という概念をより一層拡大するものである。さらに、ポストモダン・フェミニストたちは純粋な「経験」(experience) の存在に盲目的に頼ることにも疑いの目を向ける。ポストモダン的立場から言えば、「経験」とは限りなくテクスト的な (textual) ものである。スコットが「経験」(Experience) という論文の中で展開している議論によれば、「経験」は言説によって構築・再構築されるという本質もつものであり、常にある特定の解釈の結果なのであり、解釈ぬきには存在できないものである (Scott 1992)。したがって、「経験」を「真の知識」の源泉 (あるいは、その証拠) として、絶対的なものと考えることは、「経験」がそもそもなぜそのように解釈・構築されたのか、という最初の問題を見逃してしまうことになる。これは、所与のイデオロギー体系を再生産するものであり、批判的な姿勢ではない。

即ち、ポストモダン・フェミニストたちは「女性の経験」という、それまでのフェミニストが最も重視してきた概念を、いわば、根底から揺るがす議論を展開したと言えよう。ここで、フェミニスト運動が、その教育活動も含めて、いかに女性の「経験」を重視してきたかを思い出さねばならない。そして、この点こそが女性の「経験」を基礎と考える立場理論フェミニスト (および従来のフェミニスト一般) たちが、簡単にポストモダン・フェミニストたちに賛同することのできない点であると言ってよいだろう。ここで、「経験」という言葉を「現実」(reality) という言葉で置き換えてもよい。簡単に言えば、ポストモダン・フェミニストたちは、つまり、「言説以前の現実」は存在するのか、という問題を提起していると言えよう。「現実」とは言葉 (=言説、discourse) によって生み出されるものであり、その意味において、「現実」は純粋には存在しない。(本稿では深く立ち入らないが、この考え方は基本的に構造主義を踏襲する考え方であると言ってよい。)

言うまでもなく、この考え方は社会学的方法における経験主義 (empiricism) と対立する。フェミニスト立場理論に結び付いた研究方法は、どちらかと言えば経験主義に立っていたと言えるわけで、ポストモダン・フェミニストからの批判にどう応えるかは、今後の重要な課題である。さらに、ポストモダン・フェミニストたちの議論をどのように教育実践の中に組み入れていくのかも、重要な (そして、難しい) 課題である。

5. 結語

今日において、フェミニズムの影響に言及す

ることなしに教育の理論及び実践を語ることは、難しくなってきている。それは、現代のフェミニズムが教育の根幹に関わることがら、すなわち、「知識」とは何か、「知る」とはどういうことか、「知る者」と「知られる者／物」（つまり、主体と客体）はどのように関係するのか、「知る方法」と「知識」はどのような関係にあるのか、といった諸問題を鋭く追究してきたからである。つまり、「視点」や「経験」をめぐる知識社会学的考察を深めてきたからである。

人々が「知識」をめぐる一連の問題に与える答えは、実は、人々が前提とする理論的立場（それは、意識的でも無意識的でもありうる）に深く関わっている。フェミニストたちの間では、「知る」ことをめぐって、また、その理論的立場をめぐって、大きな論争がくりひろげられてきたのである。それは、とりもなおさず、フェミニズムにおいて「教育」および「教育研究」が問われてきたということである。

「女性の視点」あるいは「女性の経験」といっても、非常に多義的なもので、決して一つに収斂するものではない。また、ポストモダン理論に依れば、「経験」や「現実」すら言説によって作られるものである。しかしながら、「女性の視点」、「女性の経験」を論じることが、無意味なわけでは決してない。むしろ、本質主義に陥ることなく、多様な「女性の視点」を明らかにすることこそが有意義となってくるであろう。また、ポストモダン・フェミニストの立場に立てば、教育の社会学的研究においてカリキュラムやペダゴジーは「現実」をつくり出す「言説」として分析されねばならないだろう。さらに、そのような「言説」がどのような立場から生み出されたもので、どのようなイデオロギー的な方向性を持ち、個々の教育の場面でどのように働くのか、といった点を注意深く明らかにしていくような研究及び教育実践が求められることになる。

教育とは、基本的には、「知識」あるいは「真実」を生み出す営みである。教科書に「ウソ」が書かれている場合もあるが、教育とは「ウソ」を教える営みであると主張する人はいないだろう。しかし、ポストモダニズムは、「真実」を疑ってみることを求める。もちろん、疑ってみることは、必ずしも、「真実」が存在しないとか、全てのことが「真実」であるとか結論することではない。むしろ、学生・生徒が「真実」を脱構築し、再構築できるような力を身につけることを求めるのである。

注

(1) 立場理論については、R. W. コネル(Robert W. Connell）の著作『学校と社会的正義』（School and Social Justice）に詳しい（Connell 1993)。

(2) ちなみに、この二律背反については、テリー・イーグルトン（Terry Eagleton）が『ナショナリズムと植民地主義と文学』（Nationalism, Colonialism, and Literature）所収の論文において、明解に、次のように指摘している（Eagleton 1990)。「女性」というカテゴリーを設定しようとする権力に挑まねばならないにもかかわらず、政治的な運動としては一般的な「女性」というカテゴリーを構築することが必要なのである。

(3) ここでは、「ポスト」な傾向にあるフェミニストを総括しポストモダン・フェミニストと呼ぶが、彼女たち内部での主張が必ずしも一様ではないことをあらかじめ断っておきたい。

参考文献

Anzaldua, Gloria (1990) Haciendo caras, una entrada [an introduction], in G. Anzaldua (ed.), *Making Face, Making Soul: Haciendo Caras*, San Francisco, Aunt Lute foundation books.

Butler, Judith (1992) Contingent Foundations: Feminism and the Question of "Postmodernism," in J. Butler and J. W. Scott (eds.), *Feminists Theorize the Political*, New York, Routledge.

Connell, Robert W. (1993) *Schools and Social Justice*, Toronto: Our School/Our Selves Education Foundation.

Flax, Jane (1990) Postmodernism and Gender Relations in Feminist Theory, in L.J. Nicholson (ed.), *Feminism/Postmodern-*

ism, New York, Routledge, Chapman & Hall.

Flax, Jane (1992) The End of Innocence, in J. Butler and J. W. Scott (eds.), *Feminists Theorize the Political*, New York, Routledge.

ジェンダーに敏感な学習を考える会 (2001)『ジェンダーセンシティブからジェンダーフリーへ』すずさわ書店

鄭暎惠 (1996) アイデンティティを越えて, 井上俊他編, 差別と共生の社会学 (岩波講座現代社会学 15), 岩波書店

Scott, Joan W.(1992) Experience, in J. Butler and J. W. Scott (eds.), *Feminists Theorize the Political*, New York, Routledge.

Smith, Barbara (1990) Racism and Women's Studies, in G. Anzaldua (ed.), *Making Face, Making Soul: Haciendo Caras*, San Francisco, Aunt Lute foundation books.

Smith, Dorothy (1993) The Out-of-Body Experience, unpublished manuscript.

Eagleton, Terry (1990) Nationalism: Irony and Commitment, in Terry Eagleton, Fredric Jameson, Edward W. Said, *Nationalism, Colonialism, and Literature*, Minneapolis, University of Minnesota Press. (邦訳　増渕正史他訳 (1996)『民族主義・植民地主義と文学』法政大学出版局)

Weiler, Kathleen (1988) *Women Teaching for Change: Gender, Class & Power*, New York, Bergin & Garvey.